

※本書は2004年に中央公論新社より発刊した「あなたの脳にはクセがある」都市主義の限界」を改題し、再編集したものです。データ所属、肩書などは掲載当時の内容をそのまま掲載しております。

## 目次

### 第1章

# 「考えているかどうか」を考える

## 考えない人間が増えている 16

教育の現場で「考えさせない」という問題点……………16

都市化がもたらしたもの……………19

脳にはクセがある……………23

人間が考えたことは必ず実現する……………26

## 情報社会の「人間の幸福」 30

ネットの発達が人間の脳に与える影響……………30

「お受験」教育の結果……………33

本当の自分に気がつかない日本人……………37

新たな共同体を構築するとき……………41

## 第2章

# 「少子化」について考える

日本の子どもたちの未来 46

戦後の社会変革が子どもたちに与えた影響…………… 46

子どもは「自然」である…………… 49

ゲームは子どもたちを現代世界に適応させる…………… 52

教育の自転車操業を止めるとき…………… 56

一日に一度は自然と対面するべき…………… 60

「少子化」は問題なのか 64

「貧乏人の子沢山」の論理…………… 64

日本の少子化は女性問題である…………… 69

はるかに深刻な子ども教育…………… 72

女ばかりがなぜ強いのか 76

わが国は「女ならでは夜も明けぬ国」…………… 76

「男らしく」「女らしく」は文化だった…………… 79

男は遺伝子の運搬手段に過ぎない…………… 83

## 第3章

# 「老化」について考える

そもそも歳をとるとはどどういうことか 88

長持ちさせることは可能だが、死ぬことに変わりがない…………… 88

細胞は死なないが、個体は滅びる…………… 92

「老化」という現象が存在するわけではない…………… 95

なぜ高齢化が問題になるのか…………… 98

昔の人はなぜ隠居したのか

103

老人は機械の操作に適應できない……………103

社会システムがもはや理解できない……………106

社会システムは遺伝子の生存にとって適切か……………109

第4章

「都市と田舎」について考える

田舎暮らしを望む人

114

母はなぜ都会に出たのか……………114

都会となが違うのか……………119

ゆつくりしたテンポが田舎暮らしの利点……………122

都市の生活はエネルギーを要求する……………125

「都市主義」の限界

128

大学紛争とはなんだったのか……………128

都市と田舎の対立……………133

ナチの田舎主義、ユダヤの都市主義……………139

なぜ毛沢東は孔子を批判したのか……………140

田舎の「仕方がない」は遅れているのか……………144

田舎主義もあれば都市主義もあった……………149

都会の限度を考えてみたかどうか……………152

第5章

「歴史」について考える

日本人の「歴史の消し方」

158

ことばに書かれない無意識の憲法とは……………158

教科書に墨を塗ったのは悪いことだったのか……………160

消された教育勅語は「無意識」に生きている……………	165
「歴史を消す」日本、「歴史がない」アメリカ……………	169
日本とアメリカは根本的に類似していないか……………	172
弥生人とメイフラワー号の人たち……………	174
なぜ日本人は死んだ人の悪口をいわないのか……………	176

## 日本人の起源 180

アフリカでみた植民地の名残……………	180
科学的に黒人というカテゴリーはない……………	183
日本人の祖先は故郷を捨てた人たちか……………	187

# 第6章 「現代の医学」について考える

## 現代社会の思想と医療 192

解剖と臨床の違いとはなにか……………	192
なぜ戦後の日本を「都市化」と定義するのか……………	195
ゴミブリが嫌われる理由……………	198
都市化の進行が人間の身体にもたらすものとは……………	201

## 生老病死を抱えた身体 207

すべてのものに人間的意味があると考ええる日本人……………	207
空襲と大震災では心の傷が違うのか……………	211
世界的レベルで「都市化」を考える……………	214
医療における神経系と遺伝系の問題とは……………	221
人工身体と自然の身体……………	225

医療に甘やかされた日本人

229

牛乳回収騒動に思うこと

229

現代日本人の虚弱体質

232

十分生きておくこと

236

第7章

「倫理」について考える

自殺を放置する「人命尊重大国」

242

とにかく自殺が多すぎる

242

なぜ自殺は放置されているのか

245

日本の生命倫理は生命「心理」だ

249

マニュアル時代と倫理

252

倫理道徳の根元はどこにあるか

252

倫理のマニュアル化と責任

255

思想の奴隷状態から抜け出すには

259

第8章

「犯罪」について考える

オウム事件と日本思想史

264

大学紛争とオウム事件

264

オウム・シンパ世代はきわめて純真だった

267

軍隊が消えて起こった副作用

271

都市型犯罪は予防できる

275

田舎では起こるはずがない

275

タブー化される犯罪と脳の関係

278

犯罪の予防はやる価値のある仕事

283

第9章

「政治」について考える

だから私は政治を好まない 288

現代社会を動かしているのは政治ではない…………… 288

虫捕りにとって国境はないのだが…………… 291

『朗読者』はだれかが書くべき小説だった…………… 295

この国はかたち 298

二百数十議席というかたち…………… 298

正式な論文とはなにか…………… 301

だれが学問を評価するのか…………… 304

住民投票と忠臣蔵 309

吉野川可動堰問題…………… 309

第10章

「言葉」について考える

饒舌はものごとの本質を隠す 320

「繪言」だって失言だろう…………… 320

年をとれば脳もおかしくなる…………… 324

失言問題などどうでもいいことではないか…………… 328

方法としての言葉 331

英語で書いてまで科学者になりたくない…………… 331

「主観的」な日本語、「客観的」な英語…………… 334

社会という環境を含めた言葉のあり方…………… 338

「考えることは生きよう」とすること…………… 341

言語が思想を左右する…………… 341

私がこだわった方法論的人生…………… 346

言葉という方法に人生を賭ける…………… 348

第一章 「考えているかどうか」を考える